



TITLE:

經濟學の發展と新日本經濟學の性格

AUTHOR(S):

石川, 興二

CITATION:

石川, 興二. 經濟學の發展と新日本經濟學の性格. 經濟論叢 1938, 47(5): 614-634

ISSUE DATE:

1938-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131172>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟叢論

第四十七卷 第五號

昭和十三年十一月一日發行

論叢

勢力説に於ける存在拘束性……………文學博士 高田保馬

經濟學的發展と新日本經濟學の性格……………經濟學博士 石川興二

時論

綜合リンク制について……………經濟學博士 谷口吉彦

支那法幣の發行準備及價值維持政策……………十龜盛次

研究

朝鮮の水産業……………經濟學博士 蜷川虎三

滿洲建國精神と協和會の使命……………經濟學士 中川與之助

說苑

經濟學の悲哀……………經濟學士 中谷實

封鎖貨幣制度下の國際的再保險……………經濟學士 佐波宣平

複式簿記法の傳播……………經濟學士 岡本愛次

大量觀察と大數觀察……………經濟學士 有田正三

附錄

彙報

外國雜誌論題

(禁轉載)

經濟學の發展と新日本經濟學の性格

石 川 興 二

一

今や日本經濟學の建設と云ふことが、我經濟學界の中心問題となりつゝあるが、この問題を解決せんとする態度が三つに區別され得ることは、嘗てこれを詳にしたところである。これを一言にして云へば、第一は、普遍的な經濟學のみ認めて特に日本經濟學と名付くべきものを認めざるものであつて、これが市民社會經濟學者並に社會主義經濟學者等の立場である。第二は日本に特殊な經濟學なるものを認めんとするものであつて、所謂右翼主義者等の立場である。第三は現代を以て市民社會並に市民社會經濟學の世界的なる變革期となし、新時代の經濟學の指導的なものとして個性的な日本經濟學を建設せんとする立場である。¹⁾

私はこの個性的立場に於て日本經濟學なるものを考へ、その學問的性格を明にせんとするのであるが、この學問的性格はその國民的性格と時代的性格とに於て考察されなければならない。こゝには先づその時代的性格を根本的に明にしたいと思ふのである。

經濟學の時代的性格なるものは、人間的實在の時代的性格と共に發展した。これ生ける經濟學は常にその時代的人間的實在に役立つものであるが故である。かくて經濟學の時代的性格の發展を人間的實在の時代的性格の發

1) 本誌第四十五卷第一號『現代變革期に於ける日本國民經濟學の意義』

展に相即して考察し、以て新な經濟學の時代的性格を根本的に明にせんとするのである。

二

總て發展なるものは單なる變化ではない。これを我の發展と云ふことについて考へて見ても單に變化したと云ふのみでは、昨日の我と今日の我とを同一の我であると云ふことも出来ない。また單に不變する我のみでは、また發展と云ふことは出来ない。我が變化して而も不變なるところに我の發展なるものがある。即ちそれは我の本質が一貫して顯現し行くことである。故に人間的實在の發展なるものを考へんとすれば、先づ人間的實在の本質なるものを明にしなければならない。

總て本質なるものは、そのものをしてそのものたらしむるところのものである。故に人間的實在の本質は、人間的實在を人間的實在たらしむるところのものである。この人間的實在の本質は、これを一言にして云へば、生命と表現との實踐的辯證法的關係と云ふことにある。私はこのことを嘗て次の如くに述べた。¹⁾

「これを自己の學問的生命について見るも、其生命は自己を學術的作品として外界に表現することによつて完成するものであり、而もこの表現を土臺として次の發展を續ける。而して其成長が或程度に達するならば、其生命は以前の表現に満足すること能はずして、此舊き表現を止揚し新しき表現をなすのである。……かく個人の生命について見られたところのものはまた社會についても同様である。社會の制度なるものは、社會的生命の表現である。而して此制度を表現せし其社會的生命はこの制度の下に於て成長し行くのである。かくてその生命がもはや、この制度の下に於ては發展を續け得ざるに至る。茲に生命は既存の制度と矛盾に陥るのである。……この生命は嘗ての表現たる既存の制度を止揚し、新たな表現としての制度を打立て、この下に於てその發展を續けるのである。辯證法的發展とは生命と表現とのかくの如き關係を意味するところのものでなければならぬ。

1) 拙稿『思想相對策批判』昭和七年六月號第六七一六八頁參照

ない。」この私の嘗ての考をこゝに更に發展せしむることによつて人間的實在の本質、發展、時代性格を明にし、更にこれに即して經濟學の時代性格を考察したいと思ふのである。

先づ人間的實在の本質を人間の生命の側について考へれば、人間の生命をして人間の生命たらしむるところのものは、一言にして云へばその自覺と云ふことである。既に早くアリストテレスは、人間の本質について、動物は直接に行動をなすものであるが、人間に於ては、實行の過程の前に思惟の過程がある。即ち思惟に基いて實行を爲すものであることを明にした。¹⁾ この考へは經濟學にも取入れられ、これにより人間的勞働の本質が規定された。²⁾ 却てこの人間の思惟の過程なるものは、先づ智性に於て對象を認識し、これを情性に於て價值批判し、この價值批判に基いて實現さるべき目的並にこの目的を實現すべき方策を意性に於て定立するのである。然る後これを實行に移すのである。かくて人間的生命の内的過程が外界に表現され外界即ち感覺界に於ける表現となる。

かくて人間によつて製作された表現なるものは、外界に存立し、而して更にそれ自身として人間的生命に働きかけこれを規定するのである。

これを人間の經濟生活について見れば人間を動物より區別して tool-making animal 「道具を作る動物」と呼んだことはこの點に於て深き意味を有する。他の動物は自然より直接に自己の必要とするものをとつて用ふるのであるが、人間は先づ自然より道具なるものを製作する。この道具なるものはそれを作つた人間をはなれて存立する。人間はこの道具を用ひて、その必要とするところのものを生産する。これ所謂直接生産に對する間接生産であつて、人間の經濟生活を動物のそれより區別するところのものは、先づこの間接生産にあるのである。かくてこ

1) この考の發展については『西田哲學』により教へられることが大である。

2) 拙著『精神科學的經濟學の基本問題』參照

3) Marx, Das Kapital. I. Abt. Kap. V. 1.

の道具は人間の生命を規定し動物に比すべくもない豊かな發展を遂げしむるに至つたのである。かくの如く人間の生命の表現であるところのものがそれ自身として獨立に存立し、更にこれが人間の生命に働きかけてこれを規定するところに、人間の實在の本質が存するのである。

即ち人間の實在にあつては、人間の生命と表現とが、かくの如き實踐的辯證法的關係にあつて、そこに諸種の價值が生産され享受されて居る。經濟的實在なるものに於ても、かくして經濟價值が生産され享受されて居るのである。この經濟的價值即ち富なるものも人間によつて生産され人間生活に役立つ物的價值であつて、それ自身表現の一種である。

この人間の生命の表現なるものは多種多様であつて、單に有形無形の文化財に限られて居ない。道具、富等は有形なる文化財であり、生産技術的な智識は無形の文化財である。一つの經濟的實在には、これ等文化財と異なつて、更に制度なるものが見られる。制度するものも人間の生命の表現であるが、それは人間の實在の形相であつて、人々並に諸文化財を統一してその人間の實在を形成して居るところのものである。制度はかくの如く人間の實在の有方を規定し、かくてこの人間の實在の構成要素としての人間の生命を規定するのである。而もかく規定されて居るところの人間の生命は、彼を規定するところの實在の構造を自覺し既存の制度を變革して新な制度によつて人間並に諸文化財を統一し以て新な實在を形成し實現することが出来るのである。こゝにも生命と表現との辯證法的發展關係が見られる。要するに人間の實在の本質は生命と表現との辯證法的關係にあるのである。

人間の實在が發展すると云ふことは、この人間の實在の本質が、益々具體的に實現することである。

1) 經濟の本質については嘗て詳論した。拙稿『經濟本質論』本誌第三十七卷 第六號參照。

これを人間の生命について云へば、その本質であるところの自覺と云ふことが、益々進むことである。先づ自覺の形式について云へば、思惟の過程に於て智、情、意の働きが益々分化發展してその内容が確立し而もその間の内面的統一が益々確立し行くことである。かくてそれは學的智識にまで高まり得る。またこの思惟の過程と實行の過程との關係についてもその各が益々分化發展し而もその間の統一が益々確立し行くことである。

これを自覺の内容について云へば、自覺の全體性が益々高まり行く。即ち人間なるものは自己がそこに於てあるところの實在全體とこれに於ける自己の地位を知り、この全體の發展を關心し、この全體の發展の爲めの目的とこれを實現すべき方策を打立てることが出来るのであるが、この全體は、小は家族であり郷土であるが更に自國であり、遂に人類社會であり得るのである。このことによつてこゝに越個人的意識が成立ち得る。即ち同一の全體的實在の眞の發展完成についての個々人の關心は結ばれて共同的關心となりこの共同的關心に基いて、全實在を認識しその價值を批判し目的を定立し方策を附與するのである。これ等各人の實在認識、價值批判、目的並に方策定は、はじめ必ずしも一致しない。然しこの各人は眞にその實在の發展完成を關心しこの爲めに最も確實なる智識を求めることに協力するが故に、各人の智識の偏差と限界は次第に打破せられより具體的なものとなる。かくて共同意識が成立し、これが實行に移され共同行爲となり、そこに共同表現が成立つのである。

次に表現の側について云へば、その發展は形式的に云へばそれが生命より益々確立し而も生命に働きかける力が益々大となることである。例へば道具は人間生命の表現としてそれ自身存立するものであるが、而もそれは人體と直接に結ばつて働くものとして人體の延長であり未だ尙ほ十分客觀的に存立せるものではない。この道具が

更に發展して機械となれる時、それは道具と異なり人間をはなれて客觀的に存立し自働的に働らくものである。かくてまた人間の生命を規定する力は、道具に比して著しく増大することとなる。故に道具より機械への發展は表現の發展であると云ふことが出来る。このことはまた制度についても云はれ得る。即ち制度はその初に於ては人間の生命より離れて十分に確立されず尙ほこれに従屬する性質を有するのであるが、それが發展するに従つて人間的生命より客觀的に確立し、確乎たる社會的存在として人間の生命を規定する。

表現の發展と云ふことはこれを内容的に云へば、それが益々豊富多様となることである。經濟的實在に於ける文化財について云へば、人間生活の必要に應ずる消費財が益々豊となるのみならずまたこれ等消費財を生産する爲めの生産財が益々豊となることであり、更にこれ等消費財並に生産財が益々大規模となることである。これを制度について云へば、それは發展する程全體の人間の實在の發展創造に役立つ様にこれ等生産財並に消費財と人間とを統一するところのものとなる。従つて諸種の制度が分化發展して益々よく人間の生活の必要を充すに至るのである。

人間的實在の發展と云ふことは、生命と表現との關係より見れば、表現が生命より益々客觀的に確立して存立し、生命の發展創造に益々役立つと云ふことである。而して表現が生命の發展と矛盾するに至れば、生命は益々自覺的にこれを變革するに至ると云ふことである。この生命と表現との關係は、生命と制度との間について特に顯著に見られるのである。

三

以上に於て人間的實在の發展をその本質の益々具體的な實現として考へた。この人間的實在の本質の實現なるものは人間歴史の長き發展を通じてはじめてなされ得る。故に人間の歴史をこの原理的立場より見ることによつて、そこに四つの段階を劃することが出来るのである。先づ古代は生命と制度とが十分に分化せず従つてまた共に未發展な段階であり、中世は一部の生命のみが支配的となり一般の生命も制度も未發展なる段階であり、近世は制度のみが確立しこれに對し生命は尙ほ十分に發展して居ない段階である。而して今や我々が實現すべきところのものは、そこに於て生命と制度とが共に十分に發展し従つてその間に實踐的辯證法的な關係が具體的に實現した段階である。

經濟學は、この人間的實在の發展に相即して發展する。以下このことを明にしたいと思ふ。

先づ原初的な實在に於ては、人々の生命は自覺の極めて低き程度にあり従つて無力であつたが故にたゞ共同體的のみ存立することが出来た。従つてこゝに於ては人間の生命と制度とは未だ十分に分化してゐない。その典型的なものは氏族共同体に於て見られる。そこに於ける人々は血を同じくすると云ふ信念に基きまた場所を同じくし直接に相觸れて共同生活をなし共同感情によつて充たされて居る。かくてそこに於ける總ての人々はその小さき共同体に於ける自己の地位を自覺して全體の爲めに努力すると共に全體はまた全成員の生命を重んじてこれを守る。かくてこゝに於ては、生命も制度も共に未發展ながら共同體的な人間的實在が見られるのである。

これ「人が自己を家族より民族團體に至るまでの直觀的に與られた團體の生ける成員として感じて居つた時代」であつて「個人を越ゆる共同精神の力は、この段階の第一の特相である。」¹⁾従つてこの時期の人々は「共同精神が

1) Dilthey. Deutscher Dichtung und Musik. S. 25.

2) Ibid. S. 27.

創造する領域、即ち言語、宗教、傳説、詩に於てのみ創造的に働くことが出来たのである。……その創造は民族共同體の一般的情緒によつて支持せられてゐる。¹⁾かゝる時代に於ては、經濟についても生産に關する智識が神話的な世界觀に基き神話的に表現される。こと、『古事記』等に於て見られるが如くである。²⁾

人間の活動圈が擴大し小共同體が相互に接觸するに至りかくて合同されるに至れば人間並に制度の單純性は破れて複雑化し來りその内部的並に對外的秩序の確立の必要は、自ら氏の上の力の強化を伴ふこととなる。而もその人間實在の構成が氏族共同體を以て原型とすることには異ならない。かくて民族國家に於ては氏の上の地位は貴族となる。而もその生活圈が擴大してかくの如き氏族共同體の構造を以てしては治安を維持し得ざるに至る時武力がこの社會を支配することが必要となり、かくて武斷的な權力國家の構造が實現して、封建時代となる。

封建的實在に於ては、大衆の生命は尙ほ十分に自覺的ではなく、小數の武斷的權力者の命令に服従せしめられて居る。そこには所謂「據らしむべし知らしむ可らず」なる語が妥當するのである。またそこに於ける制度も、小數權力者によつて立てられたものであつて、小數權力者が大衆を自己に服従せしめ以て權力的秩序を保持するに役立つところのものである。而もこの制度は權力者の生命より離れて客觀的に確立されたものではなく、權力者の意志によつて自由に變更され得るものとして、尙ほ權力者の生命に従屬せるものである。かくて封建的實在に於ては、小數の權力者が大衆の生命をも制度をも支配して居る。

かくの如き封建的實在に於ては、經濟生活なるものも小數權力者の支配に隸屬して居り、それ自身としての原理的な確立を有するものではない。

1) Ibid. S. 27.

2) 例へば、『古事記』上卷にある、大氣津比賣の身に五穀の種成りこれを種として播ける神話の如し。

經濟學なるものは、かゝる實在に於て、この爲政者が一國の經濟生活を支配するに當り據るべき道を明にするものとして成立つた。我國の封建時代に於て秀れたる經濟學體系を打立てた佐藤信淵は、その『經濟提要』に於て曰く「夫れ經濟は土地を經營して國家を富贍する要道にして、國土を領する者の急務なり、故に此要務に疎漏あるときは必ず國用足らずして上下困窮す、是を以て何國も皆能此要道を修め國家を安集すべし」と述べて居るが、この經濟道を明にすることが彼の經濟學である。即ちそれは國君たるものが行ふべき經濟的支配の據るべき道を規定してゐるところの經濟道學である。このことは單に日本についてののみでない。儒教に見られる經濟思想なるものも、支那の封建社會の地盤に於て成立發展せるものであつて、信淵に於て見られるが如き學的體系は有してはゐないが、同様の道學の性質を有するものである。西歐經濟學史上に於ける重商主義經濟學なるものも、國君の行ふべき經濟的方策を總括したものととして同じく封建的經濟學の性格を有する。かくて封建的經濟學なるものは、専ら規範的政策的なる性格を有するものであると云ふことが出来る。

この封建社會に於ける小數權力者の支配が、その下に於て次第に自覺し來る人々によつて否定されることにより、人間的實在は市民社會の段階に入る。この市民社會的實在に於ては、これまで小數權力者の支配に隸屬して居た諸種の文化域が相對的獨立に高められ、且つそれぞれの域に於て制度が確立されるに至る。經濟制度なるものも、こゝに至つてはじめて確立し客觀的に存立する様になつたのである。これ即ち市民社會的經濟制度である。かく確立せる經濟的制度に對して、人々の生命は、尙ほ無力なるが故に、この制度によつて一方的に規定される。かく人間的生命が無力なる所以は、市民社會制度なるものは、人々を、一方封建的權力者の支配より解放し

たが、而も他方これまでの人間の安住地としての郷土的團結より遊離し、ヘーゲルの云へるが如く (Soln der bürgerlichen Gesellschaft) 「市民社會の子」としたからである。かくて市民社會の下に現れ來れる個人なるものは封建社會の人々に比しては自覺的であるが、その自覺は單に個人的であり且つ孤立せるが故に無力である。これ等孤立せる人々は、その孤立的な勞働の生産するところの物を互に交換することによつて物的に結ばれる。かかる制度の下には富は、當然に、商品の形態をとる。即ち人々は自己の經濟的利益を關心として、この制度の全機構により機械的に決定された商品價格を基準として、特定の商品を生産してこれを販賣し、かくて得たる貨幣を以て必要とする商品を買つて經濟生活を爲すのである。かくて自ら商品を生産すべき生産手段を有し得ざるものは、これを有するものに自己の勞働を商品として賣却しかくて得たる貨幣を以て生活をするより外なきこととなる。こゝに無産者階級が生じ有産者階級と對立するに至る。この經濟域に見られる市民社會的制度は、この段階の一切の文化域を規定するに至る。即ち教育、政治、藝術、宗教、醫療等の一切の文化域を規定し、それ等の域に於て生産される諸文化價值を商品化するに至るのである。それ等文化價值は貨幣と交換されんが爲めに生産せられ貨幣を以て購はれるところのものとなる。かくて今や貨幣並に貨幣となり得るところのものがかゝる世界の支配力となる。従つてかゝるものを多く有する人が支配者となり然らざる者は被支配者となり、有産者無産者の階級的對立が激化されて行く。かくて市民社會段階に於ては經濟的制度が、ひとり經濟生活のみならず一切の人間生活を規定する。これ社會の經濟的構造が社會的存在一切の「眞實の土臺」¹⁾とされる所以であり、かくてまた「人類の意識が彼等の存在を定めるのではなく、反對に、人類の社會的存在が彼等の意識を定める」²⁾とされる所以

1) Hegle, Rechtsphilosophie. § 238.

2) 3) Marx; Zur Kritik der Politischen Ökonomie. Vorwort.

である。即ちこゝに於ては、市民社會的經濟制度によつて經濟的實在が客觀的に確立し、それが人々の生命を一方的に機械的に規定する力となつたのである。

かゝる實在に於て成立つ經濟學は、自ら封建的經濟學と異ならざるを得ない。即ち今や經濟學の研究對象は、この市民社會的經濟制度によつて形成されて居る經濟實在である。このものが、この實在に於てこれより規定されて居る個人の立場より觀られ、從つて確乎不動なるものとして取扱はれ自然科学的に分析される。かくて經濟學は、物理學的であり更に數學的であることをすら理想とするに至りこゝに所謂純粹經濟學なるものも成立つのである。これ即ち經濟學の自然科学化である。かくて封建的經濟學の根本性格が規範的、政策的であるに對し、市民的經濟學の根本性格は存在的、理論的であると云ふことが出来るのである。市民社會經濟學に於て、たとひ規範的なものが論ぜられるとするも、それは市民社會的制度自體の變革を問題とするものでなく、この市民社會制度を前提としこの下に於て如何に經濟生活を爲すべきかを問題とするものである。かくてそれは存在の理論の應用として藝術として考へられる。市民社會の進んだ段階に於ては、有産者と無産者との階級的分裂が強くなつて來るが故に規範的考察がこれに向けられることゝなるのであるが、而もそれはこの階級的對立を調和すべく中産階級の維持作成を目的としたものにすぎない。獨逸より發したる社會政策はこれである。更に進んでマルクスに於ては、この市民社會の變革が問題とされた。而もそれは、商品を「細胞形態」としてこの市民社會の成立・發展・没落を自然必然の過程として、分析したのである。云はゞ生物學的に分析したのである。即ちマルクスは、資本論第二版の跋文に於て、彼れが「マルクスの眞の方法と呼ぶところのものをかくも見事に敘述し」たとする一

筆者の文を引用してゐる。曰く、「經濟生活は生物學といふ他の領域に於ける發展史と類似な現象を呈するものである。……古き經濟學者たちが經濟法則を物理學や化學の法則と同列に置いたのは經濟法則の性質を誤解したのである。現象を深く分析して見ると、社會的有機體は、諸々の動植物の有機體と同じやうに、互に根本的に異なるものである。……かゝる研究の科學的價值は、ある一定の社會的有機體の發生、存立、發展、及び死と、他のより高級なる有機體による交替と、を支配するところの特殊諸法則の闡明にある。そして斯る價值をマルクスの書物は實際に有つてゐるのである。」即ち市民社會の變革は、マルクスに於ては動物の死と同様なる自然現象である。かくてそれは、同じく自然科學的理論を究明せるものであると云ふことが出来る。

かくして生命が―少數權力者の生命であるが―支配する封建的實在に於ては、支配的生命的經濟學が打立てられたに對し、制度が確立して人間的生命を支配し人間的生命がこれを支配せる力を有せざる市民的實在に於ては、制度の經濟學が成立した。この相異なる學問的性格はこれ等の經濟學の基礎をなす哲學についても見られる。今これを人生觀の相違について一言すれば、前者は形而上學的、生命觀に立つに對し後者は自然科學的、制度觀に立つのである。これ少數の權力者の生命により自由に一方的に支配せられる封建的實在と科學的分析の對象となり得る制度によつて機械的に一方的に規定される市民的實在とに於ける人生觀の當然の相異である。前者の例は、信淵の經濟學の哲學的基礎をなせる『鍛造化育論』に於ても明に見られ、また支那の經濟思想の根柢に於ても神祕的生命觀が見られる。後者の例は、世界精神又は神を最高原理とせるヘーゲルの形而上學的生命史觀を逆立せしめたところのマルクスの經濟的制度史觀に於て見られるのである。¹⁾

四

市民社會に於ては、人々は、封建社會のそれに比し、遙に自覺的となつた。即ち封建社會に於ける人々が少數の權力者に隸屬して他律的であつたのに對し市民社會の個人はかゝる外的權力の壓迫より自己を解放して遙に自律的となり自己の認識と價值判斷と決意とによつて行動する。而もこの自覺は總ての價值を商品化しその獲得を貨幣量にかゝらしめるところの市民社會制度の下に於ては自己の經濟的利益を如何にして有効に追及すべきかを自ら斷行し行動する外ないのである。かくてこの個人は、市民社會的制度自體に隸屬的なるものとなり、未だ眞に自覺的自律的となることは出来なかつたのである。即ち人間の自覺は既に述べしが如く、形式の側と内容の側とについて考へられるのであるが、市民社會に於ける個人は、内容的には未だ十分自覺的となり得なかつたのである。

市民社會の個人的自覺が更に内容的に發展すると云ふことは、自己がそれに於てあるところの全實在の眞の發展を關心し、この全實在並にこれに於ける自己の地位を知り、この全實在の眞の利益爲めに自己の爲すべきところのものを爲すことである。而もかくの如きことは、個人主義を原理とする市民社會制度の下に於ては不可能である。即ち市民社會制度に於ける人々の自覺の限界は、この制度自體にあるのである。故に市民社會の個人が更に自覺的に進む爲めには、市民社會制度なる個人主義制度自體が、そこに於てある總ての人々をしてその創造發展を完ふせしむることをその本質とするところの共同的制度の方向に變革され行くことを要する。

市民社會制度は人々を個人主義的に自覺せしめ、この人々の利己心を刺撃して活潑なる活動をさしめ以て諸種

の文化域に於て、封建社會に於て見得なかつた豊富な文化財を創造し蓄積した。而も市民社會制度はこれ等豊富な創造物の利用を、有産者階級に限定した。こゝに市民社會制度に於ける生産と利用の矛盾がある。例へば教育の域について、そこには封建社會に見得ざる豊富な教育設備が生産された。而もその利用は無産者階級には及ばないのである。また經濟の域についても、大規模な生産設備が用意され豊富な財が生産されるが、而もその利用は一部有産者に著しく偏してゐるのである。

然らば、この市民社會が齎した豊かな文化財を保持するのみならず更にこれを發展せしめ而もその利用をして、共同的ならしむることは人々の生命の自覺的發展と共に、市民社會制度變革の根本條件である。

市民社會制度は總ての價值を商品化することによつて人間的生命の活動力を個人の經濟的利己心に基礎付けたが故に、この制度の下に於て人々は自己の經濟的利己心を充す方向には活潑に働き然らざる方向には働かなかつたのであるが、この市民社會制度を共同的制度の方向に發展せしめると云ふことは、この個々人の利己心を壓へるのではなくむしろ更に徹底せしめ擴大する制度を求めることである。今市民社會制度と異なり自己並がそこに於てあるところの全實在の現在並に將來の爲めに働くことと云ふことが同時に自己並に子孫の爲めに働くことであると云ふが如き制度が實現され來るならば、かゝる制度の下に於ては、人々の自覺の根底をなすところの關心は自己の經濟的利益より全實在の發展完成に高まり得るのである。かくて市民社會に於て個人的に自覺せし人々は、前述せしが如く、更に共同的に結ばれ、そこに共同的自覺が發展し來る。共同的制度はこの共同的自覺と共に共同的文化財の生産並に利用を發展せしむる。この生命と文化財と制度とは互に規定し合ふて共同的方向に發展す

る。かくて生命と制度との實踐的關係によりこゝに具體的な共同體の實在が次第に實現し來るのである。我々は、嘗て共同體的存在の仕方をして居た。氏族共同體がこれである。而しそれは本能的な共同體であつて生活圏の擴大と共に破壊されたのである。其後人類は中世を通じてより大なる範圍の支配に訓練され、市民社會を通じてその自覺を個人的に著しく高め、更に豊富な文化財を齎した。かくて今や嘗ての無自覺的な小共同體を自覺的な大共同體として實現することを可能とする準備がなされたのである。

かくて實現される具體的な人間實在に於ては、市民社會を通じて齎された諸種の文化財並に市民社會を通じて自覺的に高まつた人々が、今や共同的制度によつて共同體の實在に構成されてゐる。人々はこの全實在を自覺する。即ちこの全實在の發展を關心し、この全實在に於ける自己の地位を知り、この爲めに努力する。従つてかく共同的自覺に於てある人々は、常に全體の關心より全實在を知り全體の爲めにはその制度を絶へず形成發展することに努める。こゝに眞に自覺せる生命と確立せる制度との間に具體的な辯證法的關係が見られるところの最も具體的な人間的實現が實現する。

かくの如く、そこに於て共同體の制度と全體の自覺とが實踐的關係にあるところの共同體の實在に於て成立するところの經濟學なるものは、封建的實在並に市民社會的實在に於て成立つ經濟學と自ら異ならざるを得ない。的生命によの共同體の實在に於てある全體の自覺の立場より、全實在が人間的生命を規定するものとしてまた人間それはこつて變革され得るものをして、見られて居るところの經濟學である。

封建的經濟學の根本性格が少數權力者の立場よりその支配の爲めの規範を求めた道學であり、市民社會的經濟

學の根本性格がそこに於てある個人の立場より確乎不動と考へられる制度の分析の存在學であるに對し、今やこの共同體的實在に於ける經濟學はこの存在と規範とを實踐的に統一したところの眞に具體的な實踐學である。

今や人間をして實在を規定することを得しむるものは人間實在に對する具體的な自覺である。故に共同體的實在に於ける人間の自覺が學的に高められたものとして、こゝに成立つ經濟學は最も自覺的な意識の構造を有するところの實踐學でなければならぬ。即ちこの實踐學の根底を爲すものは全體的生命の創造發展を計らんとする共同體的關心である。而して先づこの共同體的實在を富の觀點より見て經濟學の對象となし、その共同體的な構造を先づ體系的に明にし、この體系的研究に基いて、その發展的構造を明にする。これ類型的認識を爲す理論的部分である。この發展的構造論に基いて、この共同體的實在の成立を歴史的發展的に明にする。これ個性的認識をなす歴史的部分である。この理論的部分と歴史的部分とによつて、その實在認識がなされる。次にかくて認識されたる實在が價值批判されなければならないのであるが、この價值批判の立場は全體的生命の創造發展の立場である。この價值批判によりて實在を保持すべきか變革すべきかが定まる。これを變革することが必要であるとすれば、これを變革することによつて新に實現さるべき目的たる實在の構造並にこの新たな構造をそれによつて實現する爲めの方策が明にされなければならない。この目的定立、方策附與が政策的部分の内容を爲すものである。かくて價值批判は理論的並に歴史的なる實在認識部分と政策的部分とを結んで居るのであるが、この價值批判の立場即ち全體的生命の創造發展の立場がその全體を一貫せるところのものであつて、これに立つて實在認識も政策的定立もなされるのである。而して以上の一體が實踐學としての經濟學を構成するのである。

かくの如く共同體經濟學に於ては、具體的な自覺の構造として、理論的實在認識、歴史的實在認識、價值批判目的定立、方策附與の各が分化發展して確立し而もそれ等のものゝ間に内面的統一が確立されて居る。かくて思惟全體が確立してゐるのみならず、この思惟はまた實行と分化し而も統一されたものでなければならぬ。即ちそれは實行に移されて實在の發展に實踐的に役立つものでなければならぬ。こゝに眞の意味に於て知行一致があるのである。

かくの如き共同體經濟學の第一步をなすものは、現代の市民社會制度をかくの如き共同體制度へ變革するところの經濟學でなければならぬ。この經濟學に於ては、そこに與へられて居る實在は、市民社會經濟に於けると同様市民社會であるが、この實在は今や單に分析さるべき不動なる對象としてに市民社會的個人に對し與へられて居るのではなく、共同體的實在に於けるが如き具體的な自覺に對して、それよりより高き人間的實在を實現すべき素材として與へられて居るのである。故にこの具體的な自覺は、實在の眞の發展を計らんとする立場に立つて市民社會の本質的構造を明にしそれが人間的生命の創造發展を阻害する所以を明にする。次にこの市民的實在の發展的構造を明にし現實の中に共同體に至るべき契機を明にする。この理論的研究に基き、興へられたる現代の市民的實在を歴史發展的に研究しその個性的構造を明にし、以てその中に共同體實現の契機を明にする。以上が理論的並に歴史的なる實在認識である。かくてこの實在認識は單に實在を實在として認識するものではなく市民的實在を、それより共同體的實在を實現する爲めの素材としてその中に共同體に至るべき契機を明にするのである。この云はゞ素材論に基いて、この素材より實現さるべき共同體の構造を具體的に明にするのが目的定立

の論である。而して現實在よりこの共同體的構造を實現する方策を明にするのが方策附與の論である。

これを經濟學史上について見れば、最初に現れたる偉大なる體系は正に市民社會を共同體に變革せんとするものであつた。それは古典ギリシャの市民社會的段階に於て、この市民社會を共同體へと變革すべく考察された。而もこのギリシャに於ては、經濟的文化域が他の文化域に對して相對的獨立の域に高められて居なかつたが故に經濟學的考察も尙ほ他の政治的考察と分化せずし一體として倫理學又は政治學を構成して居た。かくてアリストテレスの倫理學並に政治學の中には經濟學的考察が含まれて居り、市民社會の本質的構造、その價值批判、これを變革すべき仕方、かくて實現さるべき共同體についての考察が含まれて居るのであるが、而もそれが統一されて一個の經濟學を形成するに至つて居ない。¹⁾ 經濟學が一科の學として而も變革學として具體的な實踐學的體系を備へたのは、その二千年後のことであつた。即ちそれはアダム・スミスの富國民論に於てである。それは封建的實在を市民的實在へと變革せんとするものであつて、第一、第二兩篇の理論的部分、第三篇の歴史的的部分、第四、第五の政策的部分より成るところの具體的な實踐學であつた。

現代の市民社會の共同體への變革について、かくの如き具體的な實踐經濟學を打立てると云ふことが、先づ今日の經濟學界の最も重要な任務ある。

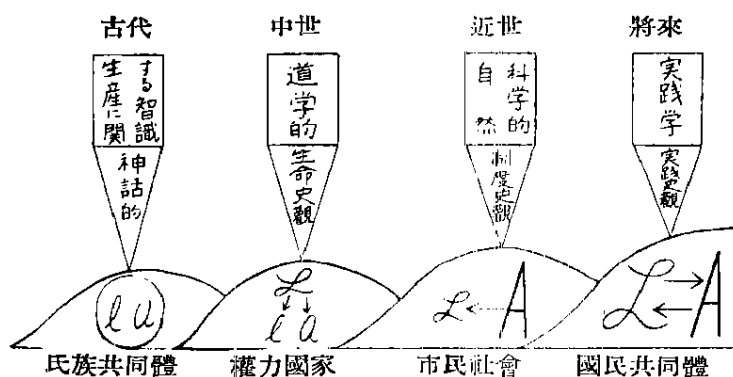
この新に成立つところの經濟學を基礎づけるところの哲學は、生命史觀でもなく制度史觀でもなく、生命と制度との實踐的辨證法史觀である。以上の人間的實在の發展の考察は、この實踐史觀の立場によつてなされたのである。

1) 2) 拙著『精神科學的經濟學の基礎問題』

五

以上に於て人間的實在の性格の發展に即して經濟學の性格の發展を考察し、以て新に將來すべき人間的實在の

性格と經濟學の性格とを明にした。今このことを要約すれば上圖の如くである。



即ち古代に於ては、未發展なる生命と制度aとが未分前の統一にあつて氏族共同體的實在を成して居る。こゝに成立つ組織は根本的には神話的であり經濟の組織もこれに基礎付られてゐる。中世に於ては、少數の權力者の生命Iが尙ほ十分に發展せざる一般の人々の生命Iと制度aとを支配することによつて權力國家的實在が成立つ。こゝに道學又は規範學としての經濟學が成立ち形而上學的生命史觀に基礎づけられる。近世に於ては、個人主義經濟制度Aが確立することにより人々の生命Iは個人主義的に自覺し來るが而もこの經濟制度に隸屬しこれによつて一方的に規定される。これ市民社會的實在の根本性格である。こゝに於ける經濟學は、この確乎不動に見へる經濟制度の分析を事とする存在學であることをその根本性格とする。この市民社會の個人主義的制度が共同的方向に發展せしめられることゝ、かくて市民社會に於て個人的に自覺せし生命が次第に全體的に自覺

「經濟學」「哲學」「實在」
 することゝが互に規定し合つて進むことにより、具體的な國民共同體の實現が次第に可能となる。新に成立つべき經濟學はこの確定し發展し行く經濟制度Aと全體的に自覺し行く生命Iとをその實踐的關係に於て把握し具體

的なる共同體の成立發展をはかるところの實踐學である。この經濟學を基礎づける哲學は生命と制度との實踐的辯證法史觀である。

以上明にされたる人間的實在並に經濟學の時代的性格は、これを各國民の歴史並にその經濟學史に於て見られるところの普遍的な構造である。各國民に於ける個性的な構造は、この普遍的な時代的構造が、各國の特有なる事情によつて特殊化されたものとして理解し得られるところのものである。

我々は進んで日本の個性的構造を明にしなければならないのであるが、この日本の個性的構造を規定する特殊的事情は何であるか。これを一言にして云へば、我國に於ては古代に於て天皇を中心とする氏族共同體的構造が國民的單位に於て成立し、これが斷絶することなく、あらゆる時代を通じて、一貫して我國民的實在の根底的構造をなして以て今日に及んだのである。このことが、我國民史の各時代に特殊な構造を與へた。かくてまた今日の我國をして現代の文明國中最も共同體的構造に於て秀れたる國民たらしめたのである。

如何なる國民が如何なる時代の經濟學を指導するかと云ふことは、時代の性格と國民の性格によつて定まる。これを西歐について見るも、權力國家的性格を有せる獨逸國民のカメラリストンは封建的經濟學としての重商主義學派の代表的なるものであるに對し、市民社會的性格を豊に有せる英國經濟學は市民社會經濟學の代表的なるものであつた。これまで英國は經濟學の母國であると云はれたのであるが、このことは市民社會經濟學について眞であつた。封建社會より市民社會への變革期に當り、この變革の爲めの實踐的經濟學を具體的に確立したアダム・スミスをはじめとして、この市民社會の理論的分析を以て市民社會經濟學を確立し發展せしめたるリカルド

ウよりミルに至る舊正統學派、マーシャルにより創められた新正統學派に至るまで、その重要な人々は英國に於ける經濟學者であつた。獨逸經濟學なるものはこの英國經濟學の市民社會理論に、國家權力の働を加味したに過ぎないのであつて、市民社會經濟學の主流はどこまでも英國に止まつたのである。加之この市民社會の理論的分析を更に押し進めてこの市民社會自體の發展的構造の中に市民社會を否定すべき契機を明にせんとしたるマルクスも亦、この英國に於てこそその經濟學を大成し得たのである。かくて社會主義經濟學の母國もまた英國であると云ふことが出来る。かくて市民社會經濟學は、市民社會の將來體系、安定體系、否定體系に至るまで悉く、英國を母國すると云ふことが出来るのである。

總ての國民は、その眞の發展の爲めには封建社會より市民社會へ進まねばならなかつた。従つてこの英國を母國とする市民社會經濟學は、今日までの市民社會時代の世界經濟學となつたのである。然しながら今やこの市民社會は變革期に當面して居るのであつて、これと共に經濟學に對する英國の指導的地位も終らざるを得ない。

即ち今や求めらるべき經濟學は、既に明にせし如く、今日の市民社會を原理的に共同體へ變革する經濟學でなければならぬ。今日見られるところの國家權力の強化と云ふことも再び權力國家を將來する爲めではなく、かゝる共同體への變革への手段としてのみ是認されるべきものである。故に今日新に生るべき經濟學の創造者であり擔當者であるところのものは、それ自身最も共同體的性格に於て豊かな國民でなければならぬ。

かくて世界が新に創造しなければならぬところの共同體經濟學の母國は實に日本である。曩に明にしたる新な共同體經濟學の時代的構造は、この新日本經濟學の時代的構造である。この時代的構造が日本の國民的性格によつて更に具體化せらるゝ時、こゝに新日本國民經濟學の性格が更に明となるのである。